

平成18年度病害虫発生予報第1号

平成18年4月6日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要

区 分	農作物名	病 害 虫 名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	苗立枯病	-	やや多い
	オオムギ	赤かび病	平年並	平年並
		うどんこ病	やや遅い	やや少ない
		小さび病	平年並	少ない
		網斑病	-	少ない
果 樹	ナシ	黒斑病	平年並	平年並
		黒星病	平年並	平年並
		赤星病	平年並	平年並
		ハダニ類	平年並	やや多い
		カメムシ類	平年並	やや多い
野菜・花き	ラッキョウ	灰色かび病	平年並	やや多い
	スイカ・メロン	アブラムシ類	平年並	平年並
	タバコ	黄斑えそ病	平年並	平年並

[参考]

気象予報（抜粋）

1か月予報（4月1日～4月30日：3月31日、広島地方气象台発表）
向こう1か月の気温は平年並みが高く、降水量と日照時間は平年並でしょう。

< 可能性の大きな気温経過 >

期 間	平均気温
4月 1日 ~ 4月 7日	平年並
4月 8日 ~ 14日	高 い
4月15日 ~ 4月28日	平年並

普通作物

[イ ネ]

1 苗立枯病

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されている。

イ 平成17年産種子は倒伏等により、苗立枯病菌が付着している可能性がある。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 主要農作物病害虫防除指針等を参考にして、発病初期に防除を行う。

イ 近年、リゾプス属菌やトリコデルマ属菌による苗立枯病の発生がみられるので、育苗環境を清潔に保ち、育苗中の温度管理及び水管理に注意する。

ウ ムレ苗が発生した場合には、タチガレエース液剤の500～1,000倍液(使用回数1回)またはタチガレン液剤の500～1,000倍液を箱当たり0.5リットルかん注し、夜間の保温と昼間の遮光に努め、苗の回復を図る。移植可能であれば、早めに本田に移植する。

[ム ギ(オオムギ)]

1 赤かび病

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 本病は出穂～乳熟初期の曇雨天及び高温で発生が助長されるが、気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されている。

イ 農業試験場内の二条オオムギ、六条オオムギの出穂期は、平年並～やや遅いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本県では近年発生が目立ってきているので注意する。また、赤かび病に対する検査基準が厳しくなっていることから、防除を徹底する。

イ 特に六条オオムギは、二条オオムギに比べて本病が発生しやすいので注意する。

ウ 発生後の防除は困難なため、予防を基本とする。六条オオムギでは穂揃い期およびその7～10日後、二条オオムギでは穂揃い期に薬剤防除を行う。

エ 防除薬剤は、トップジンM粉剤(4kg/10a)、トップジンM水和剤(1,000～1,500倍液)、チルト乳剤25(1,000～2,000倍液、使用液量60～150リットル/10a)等を使用する。

2 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	やや遅い
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 3月下旬現在、発生はほとんどみられていない。

イ ムギの生育は、平年に比べてやや茎数が少なく経過している(二条オオムギ)。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 葉色が濃く、過繁茂のほ場では多発の恐れがあるので注意する。

イ 主要農作物病害虫防除指針等を参考にして、発病初期に防除を行う。

3 小さび病

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	平年並
発生量	少ない

(2) 予報の根拠

近年、発生はほとんど認められていない。

(3) 防除上注意すべき事項

主要農作物病害虫防除指針等を参考にして、発病初期に防除を行う。

4 網斑病

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生量	少ない

(2) 予報の根拠

ア 3月18日現在、発生ほ場率11.1%(平年43.5%)、平均発病茎率0.01%(平年0.28%)でやや少ない発生となっており、上位葉への病斑の進展はほとんどみられていない。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 上位葉のほとんどに本病が進展しているほ場では、出穂期～穂揃い期にチルト乳剤25(1,000倍液、使用液量60～150リットル/10a)を用いて防除を行う。

イ 本病は種子伝染するため、発病ほ場から採種しない。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 本年のナシ園における病芽及び枝病斑などの越冬菌密度は、全般的に平年に比べてやや低いが、一部のナシ園では、越冬菌密度が県平均に比べてやや高い園が認められる。

イ 気象予報によると向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 開花前～人工交配終了後に、伝染源となる病芽の除去を徹底する。

イ 開花期に病原菌が雌しべに侵入することがあるので、開花前～人工交配直後の薬剤防除を徹底する。

ウ 薬剤は開花始めにジアリン水和剤600倍液またはジラム・チウラムフロアブル剤(ダイボルトまたはパルノックス)500倍液、人工交配終了後にフロンサイドSC2,000倍液またはベルクガード水和剤500倍液、落花期に有機銅フロアブル1,000倍液を散布する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 県内巡回調査園(幸水及び豊水)における病芽率は0.7%(平年1.8%)で、越冬菌密度は平年をやや下回った。

イ 越冬伝染源からの胞子の飛散は3月下旬から始まっており、飛散開始時期はほぼ平年並であった。

ウ 気象予報によると向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア りん片の脱落の悪い腋花芽は芽基部病斑を形成しやすく、本病の伝染源となるので、これらを開花始め～落花期に見回って切り取っておく。

イ 開花期に降雨が続くと多発しやすいので、開花前～落花期の防除を徹底する。

ウ 薬剤は、開花期前後に降雨が多いときは、人工交配終了後にサニパー水和剤600倍液を追加散布する。その後、落花期にEBI水和剤(スコアまたはマネージ)4,000倍とジラム・チウラムフロアブル(ダイボルトまたはパルノックス)500倍の混用液を散布する。

3 赤星病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 4月4日現在、伝染源となるビヤクシン上の冬孢子堆の成熟度は30%であり、ほぼ平年並であった。

イ 県予察ほ場のビヤクシン上における冬孢子堆の形成量は、ほぼ平年並であった。

ウ 気象予報によると向こう1か月の気温は平年並が高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ビヤクシン類が果樹園に近く、4月中下旬に雨が多い場合、発病しやすくなるので注意する。

イ 冬孢子堆の膨潤と小生子の飛散最盛期は、例年、満開前後の降雨直後となるので、上記黒星病と同一薬剤の同時期防除体系とする。人工交配終了後にサニパー600倍液、落花期にEBI水和剤(スコアまたはマネージ)4,000倍とジラム・チウラムフロアブル(ダイボルトまたはパルノックス)500倍の混用液を散布する。

ウ 5月以降に葉の発病がみられるときは、EBI剤(スコア水和剤4,000倍液、マネージ水和剤4,000倍液、アンビルフロアブル1,500倍液など)を追加散布する。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア ハダニ類の越冬密度は平年に比べてやや多い。

イ 気象予報によると向こう1か月の気温は平年並が高いと予想されており、発生時期は平年並の4月中～下旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 蕾や葉に発生が認められた場合は、開花始めまでにコロマイト乳剤1,500倍液を単用散布する。

イ ハダニの発生が多く認められる園では、薬液が葉裏によくかかるように丁寧に散布する。

5 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア クサギカメムシの越冬成虫数は(簡易小屋トラップ)、トラップ当たり13.4頭(平年:7.9頭)で、平年よりやや多い。また、過去10年間では平成12年に次いで越冬密度が高い。

イ 気象予報によると向こう1か月の気温は平年並が高いと予想されており、春期におけるナシ園への成虫の飛来時期は、ほぼ平年並の4月下旬～5月中旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 山間地及び民家近くの果樹園で例年発生が認められる園では、春期の被害が予想されるため、成虫の飛来を注意して観察する。
- イ ナシ園への飛来が認められた場合は、直ちにジノテフラン水溶剤（アルバリンまたはスタークル顆粒水溶剤）2,000倍液などを追加散布する。

野菜

[ラッキョウ]

1 灰色かび病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 本病の初発生時期は、ほぼ平年並の3月中～下旬であった。
- イ 3月下旬現在、現地ほ場における本病の発生量はやや多い。
- ウ 本病は4月の気温が高く、5月に低温多雨の条件で発病が増加しやすい。気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並であると予想されており、発病の増加が見込まれる。
- エ 現時点の本病の症状は、葉先枯れおよび葉身中位部の白色斑点症状がみられる初期症状であるが、今後被害枯死葉上に分生胞子の形成がみられるようになる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 4月上旬にダコニール1000の1,000倍液、4月中旬にロブラール水和剤1,000倍液、4月下旬にはダコニール1000の1,000倍液またはフロンサイド水和剤2,000倍液を株元にも薬液が十分にかかるように散布する。なお、ダコニール1000およびフロンサイド水和剤は収穫14日前まで、ロブラール水和剤は収穫30日前までの使用なので注意する。
- イ 降雨後には、枯れた葉上に多数の分生胞子を形成するので、降雨後の防除を徹底する。
- ウ 窒素肥料の過多等によって茎葉が過繁茂となったラッキョウは、株元に薬液がかかりにくい状態となっているので、丁寧に散布する。

[スイカ・メロン]

1 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 県予察ほ場(東伯郡北栄町、露地ほ場)における黄色水盤への有翅虫の初飛来は、4月4日現在確認されておらず、初飛来は平年並の4月中旬頃になるものと見込まれる。
- イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並であると予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスの換気部分や出入口には寒冷紗被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。

イ 葉裏を注意して観察し、初期防除を徹底する。

ウ スイカにおいて、ハウス栽培では交配前にミツバチへの影響のないチェス水和剤 3,000 倍液を散布する。トンネル栽培ではつる引き誘引時期に、チェス水和剤 3,000 倍液を、交配前にバリアード顆粒水和剤 4,000 倍液を散布する。

メロンでは、チェス水和剤 3,000 倍液、バリアード顆粒水和剤 4,000 倍、DDVP 乳剤（ホスピット乳剤、DDVP 乳剤 50 等）2,000 倍液、モスピラン水溶剤 8,000 倍液等を散布する。

[タバコ]

1 黄斑えそ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

アブラムシ類の発生時期および発生量が平年並と見込まれることから、本病のアブラムシ類によるジャガイモからタバコへのウイルスの伝搬、発生時期および発生量も平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 近隣にジャガイモを栽培している場合は、アブラムシ類の飛来源となるので掘り残しイモをすべて除去する。

イ ジャガイモやタバコを透明寒冷紗等により被覆栽培することによって本病の伝染を防ぐ。

ウ タバコとジャガイモに対して 4 月下旬頃から定期的にアブラムシ類の防除を行う。

薬剤は、タバコにはベストガード水溶剤 2,000 倍液、アドマイヤー水和剤 2,000 倍液等を散布する。

ジャガイモにはベストガード水溶剤 2,000 倍液、アドマイヤー水和剤 2,000 倍液、ランネット 45 水和剤 2,000 倍液等を使用し、薬剤散布を行う。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。
詳しい内容は、独立行政法人 農薬検査所の「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.acis.go.jp/>)

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、
周辺への飛散には充分注意しましょう。

《鳥取県病害虫防除所ホームページ》

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫の発生予察情報、現地巡回調査結果などの指導情報、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所
〒680-1142 鳥取市橋本 260
TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-5647
E-mail : byogaichu@pref.tottori.jp 又は kttr0301@sp.jppn.ne.jp

次回、予報第2号の発表は、4月27日(木)の予定です。